

氏 名： 吉村 恵美子
学位の種類： 博士（看護学）
学位授与年月日： 平成 30 年 3 月 10 日
学位記番号： 第 20 号
学位授与の要件： 学位規則第 4 条第 1 項該当
論文題目： 急性期病院における高齢患者の看護アセスメント力向上を目指した教育プログラムの有効性の検討
Effectiveness of an educational program for hospital nurses to learn a comprehensive gerontological nursing assessment
指導教員： 教授 渡辺 みどり
副指導教員： 教授 岡田 実
論文審査委員： 主査 教授 伊藤 祐紀子
副査 教授 安田 貴恵子
副査 教授 喬 炎
副査 教授 安東 由佳子
副査 教授 渡辺 みどり

博士論文要旨

研究目的

本研究の目的は、急性期病院における高齢看護の質向上を目指すため、看護師に対して、高齢患者の看護アセスメントに関する教育プログラムを実施し、その有効性を検討することである。

研究方法

1. 研究の枠組み

本研究は、「急性期病院における高齢患者の看護アセスメント力向上を目指した教育プログラム」を用いた介入研究である。研究Ⅰは、老人看護専門看護師に半構成的面接を行い、教育目標を抽出した。次に現任教育担当者にグループ面接を実施、効果的な教育方法を抽出し教育プログラムを作成した。研究Ⅱは、急性期病院の看護師に本プログラムを実施、看護師のアウトカムを測定し、その有効性を検討した。

2. 急性期病院における高齢患者の看護アセスメント力向上を目指した教育プログラムの作成

研究Ⅰ-1 教育目標・教育内容の抽出

1) 研究方法

- (1) 同意が得られた、急性期病院に勤務する「老人看護専門看護師」5名に半構成的面接を実施した。
- (2) インタビューを逐語記録とし、質的に分析した。高齢患者のアセスメントについて語られた内容をコード化し、内容の共通性と相違性に基づき分類・統合しカテゴリー化した。
- (3) 倫理的配慮：2014年8月に長野県看護大学倫理審査委員会の承認を得て(承認番号 2014-10)実施した。

2) 結果

「高齢患者のアセスメントで重要視していること」について分析した結果、221 コード、35 サブカテゴリーが抽出され、【加齢による身体機能の変化と病状の複雑な関係を把握する】、【現在の入院中の生活行動能力の現状と満足感を把握する】、【高齢者の思いに着目し把握する】、【その高齢者の生活の継続性を判断する】、【高齢者の意思が尊重されているかを把握する】の5カテゴリーを抽出した。

研究 I-2 効果的な教育方法の抽出

1) 研究方法

(1) 同意が得られた、急性期病院に勤務する現任教育担当者5名に、グループ面接を実施した。

(2) データはインタビューの逐語記録と録画記録とした。「高齢患者の看護アセスメント力向上に関する有効な教育方法」のテーマに沿って、《重要項目》を抽出し、その意味するものを集約し、カテゴリー化した。

(3) 倫理的配慮：2015年8月に長野県看護大学倫理審査委員会の承認を得て（承認番号2015-13）実施した。

2) 結果

テーマについて語られた内容を分析した結果、30の重要項目、12サブカテゴリーが抽出され、【動機づけの促進】、【患者理解の促進】、【思考過程の促進】、【組織的な取り組み】の4カテゴリーを抽出した。

研究 I-1、研究 I-2 の結果と文献検討を加えて、「急性期病院における高齢患者の看護アセスメント力向上を目指した教育プログラム」として、5つの教育目標を設定し、教育プログラムを作成した。

3. 急性期病院における高齢患者の看護アセスメント力向上を目指した教育プログラムの有効性の検討

研究 II

研究方法

(1) 急性期病院の看護師68名に調査を依頼した。対象者数の算定は、パワー分析を実施した。推定根拠として、先行研究より $\delta/\sigma=0.5$ 程度で、 $1-\beta=0.9$ でサンプルサイズは44であった。

(2) データ収集の手段：同意が得られた対象者に対し、3か月（107日）間の教育プログラムの介入を行なった。アウトカム指標として、ベースライン時、介入直後、介入3か月後に次の調査を行った。

(3) 調査内容：看護師のアウトカム指標は、①高齢者看護の基本知識30問、②複雑な病態を持つ高齢患者のアセスメントの記述、③「看護師の自律性測定尺度（菊池ら、1997）」、④看護師のプログラム効果への主観的記述、であった。

(4) 倫理的配慮：2016年12月に長野県看護大学倫理審査委員会の承認を得て（承認番号2016-13）実施した。

結果

全ての調査に対して回答が得られた32名を対象とし、統計的検討はすべてのデータに欠損値がない22名（回答率68.75%）とした。看護師の平均年齢は33.5才、平均臨床経験年数10.0年であった。

(1) 高齢患者の看護に対する基本的な知識の正答数の平均値を、対応のある一元配置分散分析で比較した結果、全体正答数はやや有意な傾向（ $p<.056$ ）が認められ、質問肢毎に対応のある比率の差の

検定を行った結果、「転倒転落」(p<.01)、「薬剤」(p<.05)に、有意差が認められた。

(2)「看護師の自律性測定尺度」の合計点の平均値について、対応のある一元配置分散分析を行った結果、介入前と介入後3ヶ月後において、有意差(p<.05)が認められた。下位尺度の「具体的判断能力」は介入前より介入直後、介入後3か月後ともに有意(p<.05)に高く、「認知能力」、「実践能力」は介入前より介入後3か月後に有意(p<.05)に高かった。

(3)具体的な事例を通して高齢患者のアセスメントを比較した結果、【加齢を加味したアセスメント】と【生活の継続性】への着目が多かった。

(4)看護師の主観的記述は、<アセスメント力が向上した>、<高齢者への対応が変化した>などの成果を記述していた。

考察

看護師の高齢患者に対するアセスメント力の向上に対して、有効であったか検討した結果、「具体的判断能力」が介入直後、介入後3ヶ月後に有意に向上し、高齢患者の状況に対する「認知能力」も3ヶ月後には、有意に向上しており、プログラムに対する効果の可能性が示唆された。また、高齢患者に対する「実践能力」も介入3か月後に有意に向上していることから、アセスメント力の向上とともに「実践能力」の向上の可能性が示唆された。看護専門職の継続教育は、看護専門職としての成長、つまり新しい知識の獲得、自信や自律性の高まりがあることが重要だと述べられている。本研究において、教育プログラム実施後の「看護師の自律性測定尺度」は有意に向上しており、本プログラムは看護の専門職化を促す可能性を持っていると考えられる。

看護への示唆

本研究で作成した「急性期病院における高齢患者の看護アセスメント力向上を目指した教育プログラム」は現在の臨床の看護師らとともに検討し、臨床現場に活用していくための教育プログラムとして系統的に示した点に独自性がある。本教育プログラムの介入の結果、急性期病院における高齢者看護の状況認知力や具体的な看護判断力の向上に有効性である可能性があること、専門職としての看護の自律性に貢献できる可能性があることが示唆された。

研究の限界と今後の課題

本研究は教育介入研究の限界から、コントロール群を設定せず、事前事後追跡テストによる研究デザインで実施した。一定の有効性が検討できたものの効果の検証には至っていない。また、1施設に限定した介入研究の結果であるため、その効果の一般化は難しい。今後他の病院への介入を行うなどしてその効果の検討を続けていく必要がある。

論文審査結果の要旨

1) 論文要旨

急性期病院における高齢患者の看護アセスメントに関する教育プログラムの有効性を検討する3つの研究から構成される。

研究I-1は、高齢患者のアセスメントの視点を見出すための質的帰納的研究である。急性期病院に勤務する老人看護専門看護師5名を対象に半構成的面接を行い分析した。結果【加齢による身体機能の変化と病状との複雑な関係を把握する】【現在の入院中の生活行

動能力の現状と満足感を把握する】など5カテゴリーを見出だした。

研究Ⅰ-2は、高齢患者のアセスメント力向上に有効な教育方法を見出すための質的帰納的研究である。急性期病院に勤務する老人看護専門看護師5名を対象にフォーカスグループインタビューよりデータを収集し分析をした。結果、【動機づけの促進】【患者理解の促進】など4カテゴリーを見出した。研究Ⅰ-1、Ⅰ-2の結果をもとに「急性期病院における高齢患者の看護アセスメント力向上を目指した教育プログラム」を作成した。

研究Ⅱは、作成した教育プログラムの有効性を検討するための介入研究である。急性期病院の2病棟の看護師を対象に3カ月間の教育プログラムによる介入を行なった。看護師のアウトカム指標として、(1) 高齢者看護の基本知識テスト (2) 複雑な病態を持つ高齢患者のアセスメント記述、(3) 看護師の自律性尺度、(4) 看護師のプログラム効果への主観的記述より調査した。結果、量的、質的にその効果の可能性が示唆された。

2) 審査結果

第1回目審査(平成29年12月20日)では、研究の必要性および問題の所在が不明確であること、「看護アセスメント力」の用語の定義の必要性、研究Ⅰの結果を教育プログラムの目標および内容として妥当とした根拠が不明確であること、研究Ⅱの研究デザインとしてRCTを用いず、対照群なしの前後比較デザインを選択した理由、方法の妥当性と限界の説明不足、介入施設の特徴が不明確であること、用いた尺度の具体的項目の提示がないこと、図表を用いての結果の提示に整理が必要であること、介入途中で脱落した対象者の理由説明が必要であること、介入3か月後まで協力した対象者の意欲・関心の偏りの検討が必要であること、研究デザインの限界および交絡因子を含めた教育プログラムの有効性を検討することなどが指摘された。

第2回目審査(平成30年1月30日)では、第1回目審査の指摘事項が適切に修正されているか否かを協議した。概ね修正はされていたが、急性期病院に入院する高齢患者をめぐる問題の整理、用語の定義の不備、研究Ⅰ-1の除外条件のわかりにくさ、研究Ⅱの研究デザイン選択の説明不足、交絡因子の多い高齢者のアウトカムの必要性、介入3か月後に実践力が高まる理由説明、本研究の対象者の特徴を踏まえた考察の必要性など課題が残った。第2回目審査での指摘事項については、平成30年2月8日に再提出された論文において適切に修正されていることが確認された。

我が国の急速に進む超高齢化社会において、高齢者の入院をめぐる問題は深刻である。身体各機能の減退および予備能力の低下から回復の遅延、急性増悪、重篤化、長期化、合併症の併発等のリスクを伴う。さらに入院環境への不適応から、失禁、せん妄、認知の混乱、転倒転落などが生じやすい。本研究は、これらをいかに予防しながら入院生活を支え、高齢患者と家族の意思を尊重し、個別的で質の高い看護を提供するか、その実践の基盤となるのが高齢患者の看護アセスメント力であると着想している。海外では既に急性期にある高齢者看護の教育介入研究が進んでいるが、国内では検討に至っていない。したがって本研究の取り組みは、独創性が高く、臨床的価値が高い。

急性期にある高齢患者の看護アセスメント力向上のための教育プログラム作成にあたっては、熟練した老人看護専門看護師への個別およびグループインタビューという2つの質的研究から結果を導き、国内外の先行研究と比較検討して教育目標、教育方法を見出している。

その教育プログラムを用いて介入研究を実施し、看護師のアウトカム指標をもとにプログラム効果の可能性が示唆された。一施設への限定的な実施のため一般化は難しいが、今後の追試結果の蓄積および教育方法の継続的な検討により、その可能性は十分期待できるものと思われる。

以上より、本学学位規程第4条第1項に定める博士（看護学）の学位授与に値するものと認め、最終試験に合格と判定した。